

フジコー技報第27号によせて

鉄と共に生きる

～神戸製鋼所における鉄づくりとフジコー様との絆～

株式会社神戸製鋼所
専務執行役員
加古川製鉄所長

宮崎 庄司
Shoji Miyazaki



1. はじめに

元号が変わり「令和」の初回を飾る「フジコー技報 第27号」に寄稿する機会を頂き、感謝致します。

また、合わせて、長年にわたり弊社（神戸製鋼所）加古川製鉄所の安定稼働達成にご尽力頂いていることに対して重ねて感謝申し上げます。

本稿では、弊社における鉄づくりの物語（過去、現在、未来）を通じて、「株式会社フジコー」様との関わり（絆）について語らせて頂きたいと思えます。

一企業の話ではありますが、鉄づくりの現場で生きている者の「思い」を汲み取っていただければ幸いです。

2. 過去

弊社における高炉一貫製鉄所の歴史は、昭和32年5月の灘浜第一期工事（現在の神戸製鉄所）の着工により始まりました。この工事は、六甲山系の丸山と天神山の土を削って海面を埋め立てるといふ、当時の原口忠次郎・神戸市長のアイデアによって進められました。一方、製鉄所の象徴である高炉は、八幡製鉄所から設計図を購入すると共に技術者を嘱託として迎え、建設工事をスタートしたそうです。

そして、昭和34年1月16日、当初計画からは約4ヶ月遅れて第一高炉の火入れ式を迎えました。全社員の悲願であった銑鋼一貫体制のスタートを祝福するかのように晴れ渡った空の下、外島健吉・第九代社長の手で付火材に神火が移され、万歳三唱の渦の中、高炉は稼働しました。

高炉の稼働は当時の社員に多大な活力を与えたようで、製鋼課に所属していた永井親久氏（後の副社長）などは“高炉見学”と称し同僚と共に塔頂まで登り、「万歳！頑張れ！灘浜一号高炉！」「俺たちもやるぞ」と蛮声をあげたと云います。高度経済成長下で働く人々のエネルギーを感じるエピソードです。

こうした神戸での経験を踏まえ、更なる飛躍を目指して加古川製鉄所の建設が進められ、昭和45年8月7日に第一高炉の火入れ式を迎えるに至りました。

周知の通り、製鉄所の操業は個社で全てを賄えるものではなく、多くの会社の協力（製品・サービスの提供）があって初めて成立します。この加古川製鉄所の稼働のタイミングで多くの企業に参入して頂くことになりましたが、その中でキラリと光る技術で存在感を放ったのが、「株式会社フジコー（当時は「富士工業所）」様でした。高炉の火入れに先立ち、昭和45年2月に製鉄所の敷地内に事業所を開設し、鋳型修理を手始めに、以降50年間の長きにわたり苦楽を共にするパートナーとなったのです。

3. 現在

30余年続いた「平成」が終わり、「令和」の時代厳台まりました。

振り返ると「平成」の鉄鋼業界は、“構造改革の時代”であったと言えます。

「昭和」の時代から、所謂「鉄鋼大手5社」と呼ばれる時代が長く続いてきましたが、令和元年

の現在においては当社のみが他社との統合・合併を行わず独立独歩の経営を行っているという状況にあります。

中国の影響などによる慢性的な供給能力過剰によって価格競争が激化する中で、業界において統合・合併が進む中、弊社は平成29年10月末に神戸製鉄所の上工程設備(高炉～連続鋳造)を休止し、これを加古川製鉄所に集約しました。これにより、加古川製鉄所の上工程設備の稼働率向上並びに受注構成の最適化による収益改善と、景気後退局面における低稼働率下での収益性の改善を果たしました。

元々、弊社の鋼材事業は、規模で勝負するビジネススタイルではありませんでしたが、上工程を集約した後は、今まで以上に技術、製品、サービスの高付加価値化と独自のビジネスモデルの構築により一層の差別化を図る中で、お客様を始めとしたステークホルダーにその存在価値を認めてもらう必要があります。

差別化を図るための手段の中でも「製鉄所における生産技術」は、「より良いものを、より安くつくる」ということだけに止まらず、暗黙知的な要素を多く含むことから、「他社に真似され難い持続性のある競争力の源泉」であるという意味においても非常に重要だと考えています。

特に、ここ数年間は原燃料の品位低下及び高コスト化、製品に求められる品質・機能の高度化が進む中で、これを高効率且つ高歩留で生産する技術開発を進めると共に、上工程集約を成功に導くための基盤技術の確立に力を注いでいます。

こうした中、フジコー様においては、量的成長から質的成長への転換を図る中であって、業界トップレベルのハードフェーシング技術を武器に最重要設備における「焼結機1次クラッシャーの製作」、また、高度な保全力「3号連鋳本体ロールスタンド分解整備」・エンジニアリング力で、弊社の特殊鋼線材や自動車用薄板ハイテン材などの「特長ある製品」の安定生産に対して大きな貢献を果たしています。

4. 未来

鉄づくりにおける製鉄所(生産技術)の役割は、今後その重要性を更に増すと考えています。

その理由のひとつは、世界的な環境問題に対する意識の高まりにより、(製品としての品質・機能だけではなく)「鉄のつくり方(製法)」自体に大きな価値が生まれる時代が到来すると考えるからです。

低炭素社会への移行に伴い、産業部門の中でもCO₂排出量で多くの割合を占める鉄鋼業に対する排出量低減要求は益々厳しいものになっていく筈であり、地球環境にやさしい方法で製造した鉄は一種のブランド製品となり、これを優遇する投資家やお客様が増えていくものと考えています。

理由のふたつ目は、少子・高齢化社会への移行に伴う働き手の多様化に対応していかなければ、24時間連続操業が必須条件である一貫製鉄所を維持することが困難となる世の中が到来すると考えるからです。

IoTやAIロボット等の導入によるスマート工場化をどの程度の水準にまで引き上げることができるかが、生産拠点としての生き残りを決定付ける条件にもなってくると考えます。

製鉄所の生産技術が持つ本来的な意義・役割に加えて、以上のような社会的な要請を背景として、「生産技術の優劣」が競争力の優劣を多く左右する時代となっていく筈であり、その重要性を認識した上で効果的な開発・改善の推進を推進していく必要があります。

その重要なパートナーとして、フジコー様の存在があると考えています。

- ・「挑むこと」「変わること」を是とする前向きな気質。
- ・技術開発に力を入れ、実際に時代の要請に応える技術、製品、サービスを数多く生み出してきた実績。
- ・そして何よりも、人と人の絆を大切にする創業以来の企業精神。

どれをとっても素晴らしく、新しい時代のパートナーとして、今まで以上に頼もしい存在になっていくものと期待しています。

5. 結びに

元号が変わる時、人々のマインドもリセットされ、世の中に変化が生まれると言います。私達は、そうした新しい時代においても柔軟に対応して、この業界で「山椒は小粒でもぴりりと辛い」という存在となると共に、これまで以上に社会から必要とされる事業体になることを目指します。

その実現のためには、50年来のパートナーであるフジコー様のご支援とご協力が不可欠であり、今後も良好な関係を維持・発展していきたいと考えています。

そして、力を合わせて、この加古川の地から、世の中の為になる製品を1トンでも多く送り出していきたいと考えています。

【履歴書】

みやざき しょうじ

宮崎 庄司

生年月日 昭和37年 11月12日

【学歴】

昭和60年 3月 九州大学 卒業

【略歴】

昭和60年	4月	株式会社神戸製鋼所 入社
平成20年	10月	鉄鋼部門 神戸製鉄所 条鋼圧延部長 兼 鉄鋼部門 加古川製鉄所 線材部長
平成23年	4月	鉄鋼事業部門 神戸製鉄所 線材条鋼技術部長
平成24年	10月	鉄鋼事業部門 神戸製鉄所副所長 兼 鉄鋼事業部門 神戸製鉄所 線材条鋼技術部長
平成25年	7月	鉄鋼事業部門 神戸製鉄所副所長 兼 鉄鋼事業部門 技術総括部担当部長
平成26年	4月	理事、鉄鋼事業部門 加古川製鉄所副所長
平成27年	4月	執行役員 神戸製鉄所長
平成29年	4月	常務執行役員 神戸製鉄所長
平成30年	4月	専務執行役員 加古川製鉄所長
		現在に至る